

みんな、詩を読んではない。

柘野 『ショートソング』は、主人公が歌人で、短歌がいっぱい出てくる小説なんです。「自分は歌人だ」と思っているんですけど、その本がたまたま売れたことで「小説書いてくれ」って依頼ばかりが来て、いま苦しいです。小説、ぜんぜんうまいと思っていないから。でも、出版社の人に短歌の話をすると、目をそらされるんですよ。

谷川 マーケットがぜんぜん違うもんね。
柘野 短歌の本もそこそこ売っていた時期があるのに……。なんで、みんな詩人や歌人に「小説書け」って言うんですかね？

谷川 小説のほうが儲かるからだよ。決まってるよ、そんなの。文芸市場は、小説が完全に制覇しているじゃん。

柘野 谷川さんは、ショートショート集（『ペショートショート集』）が印象的でしたけれど、「小説らしい長い小説を書いて」という依頼もたくさんあったと思いますよ。

谷川 あったけれど、ぜんぜん書けないことがわかってきて、小説は自分に向いてないってことがはっきりしました。こ

のごろは小説は読んでもつまらなくて、ほとんど読めないんです。

柘野 なんて日本人はそんなに小説が好きなんですか？

谷川 いや、外国もぜんぶ、小説のほうに行っていると思う。物語が好きなんですよ。

柘野 僕、ぜんぜん物語に興味ないんですよ。あらすじとかどうでもよくて、編集者と相談しながら書いてるんです。もちろん書きたいこともあるんです、場面の会話とか。だけど、それをストーリーにする必要をまるで感じないので、読者にとっておもしろいかどうかもわからない。

谷川 芝居を書いたほうがいいんじゃない？

柘野 そうかもしれませんね。僕、去年芝居に出たんですよ。「肉体で勝負すること」に生まれて初めて挑戦してみたんです。前田司郎さんという、自分より七つも若いけれど非常に才能のある劇作家がいて。彼の芝居が大好きだから、冗談みたいな感じで役者オーディションを受けてみた。前田さんも物好きな人で、僕を合格させちゃったんです。

谷川 セリフ覚えられるの？

柘野 大変でした。みんな演技がうまくて、とても自然にセリフを喋るんですけれど、僕はどうしてもできないんです。「どうしてみんな自分がいま考えた言葉のようにセリフを喋っているんだろう、嘘つき！」とか思ってます。

谷川 こういう人だからやっぱり、なかなか協調できませんよね(笑)。

柘野 はじめての舞台経験で、しかも、妙にセリフも出番も多い役。それが「素敵なカップルの間に割り込むストーカー役」だったんです(笑)。僕のセリフに「なんか別れた奥さんのところ行くなって、普通じゃないですよ」というのがあって、まるで僕自身に言うべき言葉みたい。それもまたうれしくて、僕という人間への皮肉にも思えるし、エールにも思えるような戯曲だったから、やっている最中は楽しかったんです(五反田団『生きてるものか』の「大原」役。けれど、その最中のふた月ぐらいは稽古でほかの仕事ができなかった。その余波がまだ続いていて、いま史上最低の貧乏なんですよ)。

谷川 たいへんだねえ(笑)。

柘野 今は、私塾的な短歌塾をインター

ネットでやったりして、生活費を稼いでいます。そろそろ歌集をまとめたといと話そうとすると、出版社の人は目を……(笑)。書店に行くと、谷川さんの新刊が山積みされてて、本当にまぶしいです。

谷川 すみません(笑)。でも穂村弘みたいに売れている人もいるよね。

柘野 そうなんです。穂村さんは、本人は本当は自他両方に厳しいかたなんですけれど、書いているものが人を攻撃していないように見えるから、たぶん読者にとって好ましいんでしょうね。でも僕の『結婚失格』に収録されている穂村さんの柘野論は、珍しく攻撃的(笑)。まあ、僕の書いているもの読む人はちよつとマゾな人というか、攻撃的なものを読んでも平気な人なんです。もともと僕は、穂村さんの大ファンなんですけれど、あんなに人気エッセイストになるとは思っていなかった。その穂村さんでも「短歌の本を出すのは難しい」と言っていたから。やっぱり、みんな「穂村弘のファン」だけれど、「短歌のファン」じゃないんですよね。

谷川 そうなっちゃうよね。ぼくなんか、

このごろ自分はタレントじゃないかって
思うもん。みんな、詩を読んでいないん
です。イベントなんかだと「あ、ナマ谷
川来た！」みたいになって、定番の知ら
れた詩を詠むと拍手喝采でしょ。教科書
で読んだあと、おれの詩なんてぜんぜん
読んでないんじゃないかって感じですよ。

枅野 そんな存在の詩人が、谷川さんの
他にいないからじゃないですか？

谷川 だって、ぼくは枅野さんと違って、
自分がなくてもいい人だから。舞台では、
人様を喜ばせたい一心だもん。

枅野 それで出てくるナチュラルな自分
があるんですよ、きつと。でも、それで
ウケるのはすごいことですよ。なかなか
そうは行かない。お笑いタレントがウケ
たい一心でネタを喋っても……。

谷川 やっぱりある程度のネームバリュ
ーもあるから、それで済んでるんですよ。
油断しちゃいけないけれど。でも、いま
さら無名の一八歳に戻るわけにはいかな
いからさ。

枅野 子どものころから、「人にウケたい」
と思っていました？

谷川 なかったですね。ある程度詩を書
いていって、だいたい中年くらいからで

す。とくに舞台上で詩の朗読を頻繁にす
るようになってからですね。活字だつた
らウケるウケないがわからないじゃない
ですか。読者カードが数枚戻ってくるく
らいだから。生で聴衆・観客と相對する
と交流があるから、そりゃあウケていな
いと、こっちはノれないしね。

親子関係の苦しい子をつくる短歌

谷川 息子さん以外の子どもと話したり
することはあるの？

枅野 街で小さい子を見ると、じっと見
つめちゃうんです。「触りたいな」と思
っていると、子どもの方から近づいてく
れるんですよ。

谷川 なんかヤバイ(笑)。

枅野 あと印象的だったのは、数年前に
TVCMに出たことがあって。そのころ
下北沢の道で通りすがった子どもが、僕
の顔を見て「こんにちは」って挨拶した
んです。そうしたら隣のお母さんがびつ
くりしてて。「なんであの人に挨拶した
の？」と訊いてる声が、あとから聞こえ
た。最初僕も理由がわからなくて、「生

き別れの息子のたましいが乗り移ったのか。神様からのメッセージか」とか思ったんです。でもそうじゃなくて、子どもってけっこう人の顔を覚えていてるから、「あ、TVで見たことがある」と思ったんじゃないかな。でも、そういうことにいちいち動揺してしまおう。

谷川 小学生に短歌を教えるに行ったりもしたんでしょう？

柘野 ええ、NHKの「課外授業よろこそ先輩」という番組で、母校の小学校六年生の子たちに。離婚直後で、とてもまいていたし、人生でいちばんガリガリに痩せていたときでした。子どもたちが「結婚してるの？」ってかわいく質問するから、「いや、離婚しちゃったんだよねー」って笑顔で話したりして辛かったんですけど……。 (厳密にいうと籍を抜いたのは番組収録後)

谷川 そういう話は、子どもたちにウケるでしょう？

柘野 意外とわかってくれる子が多かったです。あと子どもでも、親子関係が苦しくて「大人」になってしまった子が、とてもいい短歌をつくるんです、それこそ親子の確執を赤裸々に描いたような

(笑)。でも、「この短歌を放映すると、保護者からクレームが来るから」と学校の先生に言われて、泣く泣くポツにしたりとか。

子ども性と童貞性

谷川 ぼくは子どもに向けて書くときに、ある時期までは子どもを「読者」として対象化していたんです。それが、佐野洋子の影響が強いんだけど、自分の内部にある「抑圧している子ども」を外に出そうというふうな発想が転換した。そういうことってある？ 自分のなかの幼児性、子ども性を意識すること。

柘野 谷川さんは佐野さんと結婚される前から、「家庭画報」で子どもの詩を連載されたりしていましたよね？ 子ども写真つきの。

谷川 やったかも。

柘野 《うまれずにしんだ／おねえちゃんをおこして／うしろのしょうめんだあれ》(詩集『子どもの肖像』収録作「かお」後半部分より)とか、ひらがなばかりで書かれた詩でした。それを読んで、「なんて子

どもの気持ちがよくわかってるんだらう、でもこれは子どもが読んでもわからない詩かもしれない」って……。子どもの言葉を借りた、大人がはっとする詩、ってところがある。

谷川 そうね、『はだか』という詩集が子ども性のはっきり出たものなんだけれど、明らかに大人向けなんですよね。

枅野 そうか、佐野洋子さんの書かれるものが子ども性なのか。

谷川 あの人は記憶力もいいしね。

枅野 僕には、子ども性は欠けているかもしれません。前田司郎さんとかも、子どもの気持ちを書くのがすごいまいんですよね。でも僕自身は、「どうしてこんななに？」って不思議になるくらい、子どものときのことをほとんど覚えてないんです。

谷川 ぼくも記憶で書いているんじゃないんですよ。現在ただいま自分のなかに子どもののときを感じたベーシックな感情がいまだにある。淋しいとか不安とか、そのころと変わらないんです。それを書けば子どもの気持ちになるという、そういう書きかたなんですな。

枅野 『にほんごの話』って対談集のなか

でも、「人間の年齢を木の年輪の比喩で考えるようになった」と言っていましたよね。子どもの部分が中心にあって、その外にどんどん広がっていくように、歳をとっていく。

谷川 そう、ぼくは「年輪説」なんです。

枅野 それは、いつでも核の部分に触れることができるんですか？

谷川 いや、意識下にあるから、すぐに取り出せないけれど、それがあることを知っている、ぼんやりしているときにぼっと出てきたりはするんです。

枅野 僕は、高校生ぐらいの自分には比較的すぐに戻れるんです。『僕は運動おんち』が高校生の話なんです。『僕は運動お自然に書けた。でも、それ以下の子ども時代はとても遠い。印象としては、なにも考えていなくて、いつも機嫌が良くて鼻歌を歌っているような子だったんです。』
谷川 不安とかそういうものはあまりなかった？

枅野 今思うと「知能障害があるんじゃないか」と思うくらいで。ふつうに学校に行っていたし、そんなには問題視されていなかったけれど、キョトンとして「世間のことなんてどうでもいい」と思

っているというか。

谷川 世間はともかくとして、たとえ
ば「母親がいなくなっちゃうんじゃない
か」とか「いつ自分が死ぬのか」と想像
して怖くなって眠れなくなることはな
かった？ 自分のふとんからそつと出てい
って、母親がちゃんといるところを覗い
て確かめるとか？

柘野 それが不思議で、小さいときか
ら、ひとりぼっちでも平気で、「お母さん、
僕寝るからあっち行ってよ」と言う子ど
もだったみたいで。母親がそれを悲しい
顔で僕に言うんです。

谷川 じゃあ、結婚もしなくていいよう
な人なんだ。奥さんも「あっち行ってよ」
って言われたら辛いよね(笑)。

柘野 それも原因なのかな……。本当に、
子ども時代の自分がなにを考えていたの
か、ちっともわからない。僕が会えない
息子にすごく感情移入するのも、自分の
少年性みたいなものに危うさを感じて
いるからかもしれないです。僕、物心つ
いたと思うのは二〇歳くらいなんですよ。
最近なんて、「自分はまだ童貞なんじゃ
ないか？」って錯覚しそうになるんです。
「バツイチ、子どもありの四一歳」なの

に(笑)。

貶してもらえないのが不満

柘野 僕は、母親がちゃんと愛してくれ
たからなのか、自分が人に嫌われるとあ
んまり思っていないんです。基本的に、ど
んな人と初めて会うときも善意で接して
しまおうし、疑いから入ることがない。

谷川 いまだに？

柘野 ええ。それがうまいくときもあ
って、急速に仲良くなる人もいる。でも
騙されかけることもあります。自分があ
まりにも無防備に接するから、「相手も
意地悪しない」と油断している節がある。
あと、僕に意地悪しようとする人は、僕
がなにもしなくても、自滅していくん
ですよ(笑)。「意地悪な人だな」と思って
いると、その人自身が体を壊して会社を
辞めちゃうとか……。昔からそうなん
です。そんなだから、読者からの悪意とい
うものが理解できなくて、いちいちネッ
トの悪口に正直に反応してしまったりす
るんです。谷川さんの場合は、ウケよう
と思っ書いていて、今の時代だと感想

の届く道筋がいろいろあると思うんですが、評判は気にされるんですか？

谷川 もう今はぜんぜん気にならないですね。むしろ、貶してもらえないのが不満です。みんなそれぞれ「谷川俊太郎の像」を持ってしまっていて、何を書いてもそんなフィルターがかかっちゃう感じなんです。

枅野 怒ったりもしないし。

谷川 まあ、詩だからね。小説に比べるとやっぱり曖昧なものだし、批評しにくいしね。人の好みによって随分評価が変わっちゃうわけだから。

短歌の居場所がない!?

枅野 きょうは懐かしの「鳩よ!」を持ってきたんです。谷川俊太郎特集。ちょうど佐野洋子さんとお話ししていたりするんですよ。かつては、マガジンハウスなんてメジャーな出版社が詩の雑誌を出していたんですよ。それが今や、詩とか短歌の居場所がなくなってきた。短歌は新聞に短歌欄があるから、まだギリギリ……。

谷川 そりゃそうです。短歌・俳句は現代詩から見ると、メジャーですよ。結社している人は、ちゃんと収入もあるんだろうし。

枅野 「天然記念物のように、保護しよう」という意識が新聞社にもあるんでしょうね。詩のページはないですからね。それでも、自分が歌人としてデビューした九〇年代の半ばにくらべると短歌の連載も依頼されなくなったり、自分の短歌の居場所がなくなってきた感じがして。いま僕は、インターネットのツイッターってところで、短歌を毎日いくつも詠んでいってます。もう、みんなタダでどんどん読ませちゃおうと思って。そういうことでもないかと、書く場所が本当になくなっていく。僕は結社にも入っていないのですから。ただ、その場で数千人の人が毎日見てくれているので、「そんな歌人は他にいないだろう」とは思っているんですよ。

谷川 うん。でもそれは、ぜんぜんお金にはつながらないんだよね。

枅野 ええ。でも、最近やっと「お金を稼がなきゃ」とまた思うようになりました。演劇に出ているところは、稽古で必

死すぎて、生活面には危機感がなかった。単発の仕事は平気で断わってました。

世界中の子どもに向けて書く

枅野 谷川さんは「初期には宇宙にあてて書いているような詩だったのが、途中から世間を意識するようになった」と言っていたと思うんですけど、何か具体的に納めたことがあったんですか？

谷川 それはもう結婚して、子どもが生まれたことが大きいよね。それから、仕事の人たちとも付き合いがなくなってきた。ぼくは高校で辞めているから、組織になっている人間関係にはほとんど触れなくて済んでいたんですよ。親との関係も淡泊だし、兄弟もない。「他人と関係していく」ってことは、世間に出ていくことでしょ。その「最大の他者」、いちばん密接な関係になるのが女ですよね。その関係から本当に、ぼくは学びましたね。

枅野 そうかあ。自分も……もっと学ばなきゃいけないんですかねえ。

谷川 枅野さんの場合は、もう学んでい

るのに、それに気がついていないようにも見える。相手に対する感情が強いから、一步引いて見られないんじゃないかな。引いてみると、一般論的に考えられると思う。「一般論」というのも変だけど。心理学とかそういう方面で、自分たちの関係を考えることも、ある程度は必要な気もするんです。

枅野 そこは見ないようにしているのかも。演劇に出たりするのも、何かから目を逸らすためなんだろうか(笑)。それと、僕は結局「自分が悪かった」とあんまり思っていないんです。

谷川 もう一度同じ場面になったら、同じことをするだろうと？

枅野 するかもしれない。結婚中、奥さんは酒が大好きだったけど、僕はまったく飲めなくて、離婚してから少し飲むようになったんですね。だから、今なら彼女が飲むとき一緒に飲むとか、そういう歩み寄りならできそうだけれど、必ずまだどこかでつまづく気がします……。これも友だちによく指摘されるんですけど、僕は元奥さんの作品に常に正直な感想を言っていたんですね。結婚する前から彼女の大ファンだったこともあって。

そういうことはしませんでした？

谷川 ぼくはそこまで相手の仕事に親切じゃなかった、ただ感心するだけで。

柘野 ああ、僕もただ感心するだけにしておけば……(笑)。夫としては「妻を守ってあげなきゃ」という気持ちで、「この作品のこの部分は世間から批判されてしまうから、このまま発表するのは絶対やめたほうがいい！」とか熱く言ったりして、嫌がられたり。

谷川 そこはお得意の「言葉の会話術」でもっと別の言い方をすればよかったんじゃない。まあでも巧言令色はできないんだね。

柘野 それで、ものすごく彼女が怒って、焼肉屋でたくさん注文したあとだったのに、子どもを連れて先に帰っちゃったことがあったんです。仕方がないから、僕がひとり焼肉を黙々と食べて……。あれも、最後のほうの印象的な出来事でした……。

谷川 そんなおもしろい材料があるのに小説にならないの？(笑)

柘野 そのエピソードは、ちょっと詳しく明かせない事情があつて書いてないんですけど。まあ小説は基本的に、力量が

なくて書けないんですよ。登場人物の名前とかまで、編集者に考えてもらったたりしているんです。書きたいことはあるんですけど、ストーリーとしては浮かばない。

谷川 書きたいことを物語じゃないように書くのと、エッセイになるの？

柘野 エッセイになるか、短歌になるか……。僕のデビュー作は、『てのりくじら』、『ドレミふあんくしょんドロップ』という、短歌絵本なんです。この二冊は、絵本にしか見えないつくりで。短歌だと意識しないで、読める本にしたいと考えてつくったんです。実際にそう読まれているみたいですけど、とにかく「普遍的なもの」に見えるよう工夫したんですよ。つまり、短歌だと「私的わたくしなもの」を普遍化できていると思うんですけど、小説だと、それがうまくできていない気がする。

谷川 なるほどね。そのころと同じように、短歌だと言わずに、うまくごまかして出すわけにはいかないの？

柘野 ー。自分は、歌人であることに誇りをもっているんですよ。

谷川 「歌人であること」というのは何？

「短歌だよ」って本を出きないと、歌人じゃないと思っているわけ？ そのアイディアはいま行けると思うけどねえ。

柘野 ……たしかに、その絵本みたいなデビュー作は、「お父さんが買ってきた本で、わたしは小学生のときに読んだんですが、短歌だつて気づきませんでした」という人がよくいるんです。

谷川 それはある意味では理想的な読まれ方じゃない？

柘野 そうですね、いま初心にもどつて、そういうものをつくるべきなのかもしれないですね。僕はもともと、本が好きなんですね。だから、短歌はインターネットとかケータイサイトには居場所が少しだけあるんですけれど、最終的には短歌を本にしたいんですよ。いつも「小説って、なんでこんなに文字がいっぱいあるんだろう？」って思ってしまうんです。もっと全然、少なくていいんじゃないかと。実際にすごく文字の少ないエッセイ集というかストーリー集も出したことがあるんですが（『淋しいのはお前だけじゃなく、それも、ほかの文字が多い本と同じくらい売れたんですよ』）

谷川 今は、だんだんそうなっていく気

がするけど。音楽の場合、インターネットだと一曲三五〇円とかで売っているわけじゃない。あれと同じようになったら、詩も売れるんじゃないかと思っているのね。一篇三〇〇円とか。そうしたら、小説よりも、詩や短歌のほうが有利になると思う。

柘野 そうかもしれない……。ツイッタ―では、石川啄木とか、昔の歌人が詠んだ短歌を勝手にどんどん転載してみんなに読ませている人もいて、それがけっこう支持されているんです。だから、短歌と気づいていないけれど、おもしろい言葉だと思つて読む人は、いるんですよ。

谷川 そういう読者がいるほうがいいよね。だから、それをどういうふうにして、お金にかえるかでしょう。実質的には短歌であるけれども、短歌でないようにして売る方法を考えればいいと思う。それは絵本になるのが、DVDになるのが、写真集になるのが、何かある気がする。

柘野 そうですよね……。きょうは、なんだかずつと人生相談になってしまつてすみませんでした。どうも、ありがとうございます。ございました。

谷川 そうだよ、どうしたらいいんだろ

うって、悩んじゃうよ（笑）。

枅野 きよう改めて自分の中で固まった目標は、「子どもに宛てて書くこと、プラス、お金を稼ぐこと」です。本が売れたら息子が読む可能性も高まりますし。

谷川 絶対そうですよ。自分の子どもに宛てて書くことが、世界中の子どもに向けて書くことになれば、ぜんぜん問題ないわけですからね。

〈了〉

谷川俊太郎（たにかわ・しゅんたろう）
三年生。詩人。翻訳、劇作、絵本、作詞などジャンルを越えて活躍。その作品は、子どもから大人まで誰もが読んだことがあるほど、長年愛され続けている。『谷川俊太郎 詩集選』全三巻、『家族の肖像』など著作多数。

枅野浩一（ますの・こういち）
六八年生。歌人。短歌を中心に、小説・エッセイ・作詞・現代詩・脚本など幅広く手がける。そして作る本はどれも「仕掛け」あつて楽しい。『ハッピーロリーウォーリーソング』、『一人で始める短歌入門』など著作多数。ブログ <http://masunode/blog/> 今回の対談タイトルも枅野氏による。